



オーガスト
オフィシャルハンドブック
2013年秋号

大図書館の羊飼!

a good librarian like a good shepherd

▲ AUGUST

P R E F A C E — ま え が き

こんにちは、オーガストです。

初めての方、はじめまして。

何度目かの皆様、いつもご愛顧頂きありがとうございます。

オーガスト初のコンサートイベント『トラベリング・オーガスト』においで下さった皆様に、厚く御礼申し上げます。ありがとうございました。

初めてのイベントなのでいろいろと不慣れな点もありましたが、お楽しみ頂けたのであれば幸いです。

コンサートについては「またこういう落ち着いて聴けるイベントをやってほしい」「次にやるときはフルオーケストラで」「次にやるときはオールスタンディングで」と、様々なお声を頂いております。

どういう形になるかはまだ全く未定ですが、またいつか音楽イベントを開催できればいいなと思っておりまして、気長にお待ち頂ければと思います。

(でも、本業はソフトハウスなので、まずはソフトの制作から!)

それでは、多少のお時間を拝借致しますが、オフィシャルハンドブックをお楽しみ下さい。

2013 年秋 オーガスト /ARIA 拝

CONTENTS

3 …… 『大図書館の羊飼』Short Story
ケーブの魔法

7 …… 『大図書館の羊飼』-放課後しっぽデイズ-
HALLOWEEN CATS

10 …… スタッフ対談

11 …… あとがき



ケーブの魔法

大図書館の羊飼 ショートストーリー

榊原 拓

「それでは、本日の議題は……」
生徒会室に集う、生徒会役員。

その中心に座るのは、先日選挙で当選を果たした、白崎生徒会長だ。

最近、やっと生徒会内での仕事の進め方にも慣れてきたようで、わたわたしは多岐川さんにフォローされていた頃の面影は薄れてきている。

俺も桜庭も、安心して白崎を見ていられるようになってきた。

「では、この件は玉藻ちゃんが担当ということをお願いね」

「分かった。任せとくれ」

「じゃあ今日はこれで」

「ちょっと待って下さい」
手を挙げながら立ち上がったのは、多岐川さんだった。

皆が、浮かせかけた腰を再び椅子に下ろす。

「えっと、何か議題が？」

「はい」

つかつかと、白崎の脇まで歩を進める。

そして、その首元をピンッと指差した。

「白崎会長は、いつになったら生徒会ケーブを着けるつもりですか？」

「生徒会ケーブ？」

「こ・れ・で・す！」

多岐川さんは自らの襟元を指差す。

生徒会役員のみが着けることを許されているという制服の追加パーツ。

それが「生徒会ケーブ」と呼ばれるものだった。

「歴代の生徒会役員も皆が身に付けてきた、この伝統ある生徒会ケーブをつけないうちで、おかしいです」

「白崎会長長だけじゃありません。みなさんでもあります」

「ええ、だって自腹でしょ？」

「ええ」

「いや、だって自腹でしょ？」

俺たち、図書部員組を見渡す。

確かに白崎をはじめ、皆ケーブをつけていない。

何となくタイミングが無かったというか、白崎も着けてないし……みたいな感じでこれまで誰もその話題を出さなかったのだ。

言われてみれば、前生徒会長の望月さんなんかは、ケーブがとてもし合っていた。

「ケーブを着けるのって、規則なの？」

「えっ」

「規則なら、着けなくちゃいけないかなって思うけど」

「あ、いえ、そういう訳ではありませんが……」

白崎の問いに、しどろもどろになる多岐川さん。

一緒に仕事をしていて気付いたんだけど、当然だと思ってるところに、不意打ちが来るのに弱いらしい。

「規則というわけではありませんが、私たち生徒会役員の手本となるに相応しい生徒会役員である証ですから」

「えー、ちょっと質問」

手を挙げてみる。

「あ、その生徒会ケーブって、男子用もあるの？」

「えっ」

「そういう男子の生徒会役員が着けてるの見たことないなと思ってさ」

「あ、すみません、多分男子用もあったと思うんですが……ちょっと確認しておきます……」

「はいはい」

次に高峰が手を挙げる。

「ケーブって統合購買部で売ってるの？」

「はい、売っています。私もあそこで買いました」

「値段、けっこう高かったり？」

「ええと……確か一万円しないくらいだったと思います」

「あーごめん、俺今月金なくてピンチなんで、とりあえず無理」

「えっ」

「いや、だって自腹でしょ？」

「ええ」

「いや、だって自腹でしょ？」

「ええ」

次に高峰が手を挙げる。

「ケーブって統合購買部で売ってるの？」

「はい、売っています。私もあそこで買いました」

「値段、けっこう高かったり？」

「ええと……確か一万円しないくらいだったと思います」

「あーごめん、俺今月金なくてピンチなんで、とりあえず無理」

「えっ」

「いや、だって自腹でしょ？」

「ええ」

「いや、だって自腹でしょ？」



「ええ、まあそうなりますが」
「お金貸してくれるなら買えるんだけどな」
「私ですか!？」

「言い出したのは多岐川ちゃん」
「それは、まあ、そうですが……」

「ねえ、ちよっと、お金貸してくれないかなあ、多岐川ちゃん」
「い、いやです……」
「ねえってばー」

「それくらいにしておけ高峰」
「ははーっ」

桜庭にたしなめられる。

「で、どうする? 白崎」
「思案顔の白崎に話を戻す。」

何だかんだで、俺達の方針を決めるのはずっと白崎だった。

生徒会役員になった今でも、それが俺達図書館部のスタイルだ。

「ケープをつけることで、生徒会役員、生徒会長としての自覚が強まって、背筋が伸びるってのはあると思う」

「ええ、もちろんです!」

「でも……ケープが、生徒会役員と一般生徒の間に壁を作っている気もするんだよね。私は、親しみやすい生徒会になればいいなって思ってるんだけど……」

「はい」

「ですな」
御園・鈴木の一年生コンビが頷く。

「で、どうするんだ?」

「どうしよっか?」
方針は定まらなかった。

仕方ないな。

「あー、じゃあこうしてみるのはどうかな。とりあえず、一週間だけケープをつけてみるんだ。多岐川さんのことだから準備も持ってるだろ」

「ええ、まあ」

「まずはそれを借りる。そして一週間ケープを着けて過ごしてみても、プラスもマイナスも実感してから決めることにしたら」
「さすが算くんだね。それ、やってみようかな」

白崎も納得したようだ。

「あ、一週間後って、ちょうど各委員会との予算会議がある日だよな」

「ああ。生徒会長の実務デビュー戦みたいなものだから、それまでに方針を決めればいいんじゃないか」

「うん、いいと思うよ」

「では早速明日、予備のケープを持ってきますので」

「よろしくね、多岐川さん」

「パスタソースとか、落ちなくなってしまうので、くれぐれも気をつけて下さい」

「はい」

「こうして、白崎の生徒会ケープ実感生活が始まることになった。」

昼休み。

俺と白崎と桜庭は、アプリオで昼飯を食うことにした。なんと多岐川さんは朝一で白崎にケープを渡しに来たらしく、白崎は午前の授業ではずっとケープをつけていたようだ。

「寛くん、どうかな。似合う?」

「いや。あんまり」

「ひどい」

「なあ算、こういう時はお世辞でも『似合う』って言うておくべきだろう」

「お世辞なの? 玉藻ちゃん」

「あ、いや、そういうことじゃなくてだな。言葉のアヤだ」

「っていうか、白崎自身は似合ってるほしいのか?」

「うーん……どうだろ」

俺はネギ塩豚ポソ定食を頬張りながら白崎を見る。

望月・多岐川両名がケープを着けているのを見たときは、毅然とした格好いい「礼服」または「戦闘服」といった印象の装いだだったが……

「白崎がケープつけてると、なんだか『これから朝晩の冷え込みが厳しくなるので温かい格好してるんです』って感じだな」

「役に立たない感想を言うな」

「じゃあ桜庭はどう思った?」

「私は、白崎が着ていれば何でも似合うと思ってる」

「そっちこそ役に立たない感想だ」

「んん?」

「もー、やめてよ二人とも」

懐かしいコントみたいになった。

「じゃあ白崎。午前の授業では周りの反応はどうだった? その格好で受けたんだろ」

「んー……みんな割と普通だった、かな?」

「そっか」

「案外変わらないものなのかな」

「あ、何人か、ひそひそ言ってる人がいたような気もするんだけど……ちよっと自意識過剰かな?」

「その場になかったから何とも言えん」

「あとは、いつもは話しかけてくれる人が話しかけてくれなかったり。ほら、前に図書館部に依頼に来てくれた人とか。でも、これもたまたまかもしれないな……」

なんだかはっきりしないな。

ふと、周りのテーブルの気配を窺ってみる。

「……!」

桜庭も同時に気付いたようだ。

俺達はいつも通り談笑していただけのつもりだったけど、あちこちからチラチラと視線が送られてきている。

こんなことはこれまでなかった気がする。

これが……白崎のケープ効果なのだろうか。

耳を澄ませてみると――

「……あれが生徒会長の……」

「へえ、以外と……」

「素敵……」

「……憧れるよね……」

「会長もラーメン食ってるんだ……」

「……しかもミニチャーシュー丼までつけてる……」

……

尊敬に近いものから芸能人に向けるような興味津々のものまで、いろいろ聞こえてきた。

「ねえ玉藻ちゃん。ミニチャーシュー丼つきのセツトはやめといた方が良かったかなあ」

「そこは問題じゃないと思うぞ」

「ああ、俺もそう思う」

「でも食べ過ぎかも」

「いいから早く食べろ。ラーメンがのびるぞ」

「あ、うん」

ふーっふーっと思を吹きかけ、麵を吸る。
「白崎生徒会長！ ちょっとお話を聞かせてもらっていいですか！」

「ぶほっ、げほっ」
「おい、食事中だぞ」

「でもこのスクープを逃すわけにもいきませんので、食べながらでいいですから！」

白崎に迫ってきたのは、ウエブニュースの腕章をつけた生徒だった。

インタビュアーとカメラを構えた二人。
「スクープってなんだ？」

「生徒会の改革を掲げて当選した白崎会長が、従来の生徒会のやり方に屈した、という噂を聞きまして」

「つもぐもぐ……ええっ!?」
午前の授業で一緒に教室だった生徒からだろうか。

「違うなら違うで構いませんので、真相を伺えればと！」

「真相も何も、そんなことは少しも……」
「でも、『生徒会ケープ』着けてますよね？」

「その名前って正式な名称なのか？」
「どうでもいいだろ」

「で、本当のところはどうなんですか？」
ぐいぐいとボイスレコーダーを持って迫ってくるウエブニュースのスタッフ。

そして、その様子を見て、周囲には野次馬の一般生徒が集まり始めていた。

ざわざわし出した一角にアプリオのウエイター・ウエイトレスも注意を向け始めている。

「まずいな」
「白崎、こはピシッとひとつ頼む」

「う、うん」
差し出されたレコーダーに向けて、咳払いを一つ。

「……なにになに？」
「生徒会長が重大発表をするらしいぞ」

「あ、会長ケープつけてる……」
「……なんか、図書部の頃と違うよね……」

遠巻きにできる人垣。
その距離は、確かに図書部部長だった頃より遠い気がする。

「……ケープにラーメンのスープがはねてるね」
「ほんとは……」

人垣から聞こえた声に、白崎は出鼻をくじかれてしまった。

「ええっ」
「ああ、エプロンみたいな使い方のケープなんです

ね」
「ち、違いますっ」
「なるほど」

「なーんだ」
無責任な野次馬たち。

「違うんですっ、聞いて下さいっ！ これはお試し期間で——」

白崎がケープを着けて一週間。
生徒会室では、多岐川さんがぶんすかしていた。

「ごめんね、多岐川さん」
「もういいです」

一方、白崎はさつきから平謝り。
多岐川さんから借りたケープにラーメンのスープを

跳ねさせてしまった白崎。
持ち帰って漂白剤に浸けて手揉み洗いたものの、

完全には落ちきらなかったらしい。
「これ、定価で買い取ろうと思うんだけど……」

「そこまでしてもらわなくて結構です。これからもずつこのケープを着けてくれるというなら、話は別ですが」

「ううん、やっぱり着けないことにする」
こっだけは、きっぱりと言いきった。

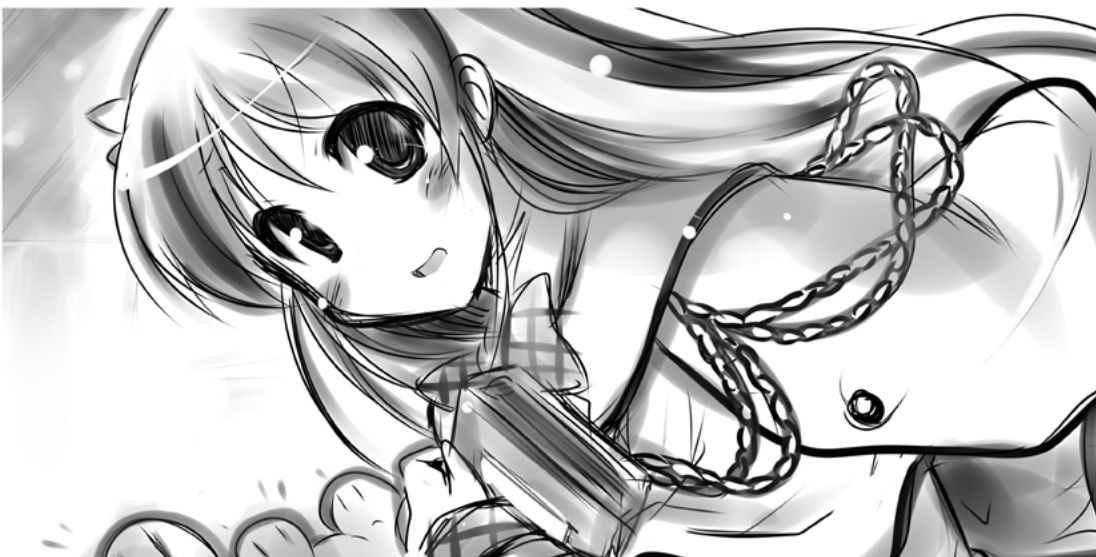
「やっぱり、なんか生徒会役員じゃないみんなと、見えない壁ができちゃってるような気がして」
「だと思いましたが。ケープは返して下さい」

「うん、ごめんね。お詫びにクッキー焼いてきたんだけど……」
「ありがたかったです」

言葉とは裏腹に、多少雑な感じでケープとクッキーを受け取る多岐川さん。
そのまますかすかと、各委員会との予算会議へと向

かった。
俺達も後を追う。

会議にはケープを着けずに臨んだ白崎生徒会長。
事前に多岐川さんに聞いていた話では、昨年は非常



に進行もスムーズで、生徒会側の提案を各委員会がほぼ受け入れて終わりになる会だったはずだ。

「現場の情報交換や指示出しのために、無線は是非導入したい」

「古くなってきた得点ボードを電光掲示できるものに一新したい」

「次回の汐美祭は記念すべき第六十回なので、装飾に力を入れるべき」

などなどの意見が侃々諤々。

生徒会への予算の要望が山のように出てきた。「聞いてた話と違ふみたいだが」

「去年は、こんなことは……」

多岐川さんもしどろもどろだ。

でも、白崎はニコニコと話を聞いていた。

これはきつと、白崎が親しみやすいからなのだろう。白崎が相手だと、思わず安心して本音を話してしま

う。これは白崎の人徳でもあるし、ケーブを着けていないことがもしかしたら影響しているのかもしれない。

「……では、一旦休憩とします。再開は十五分後ということで」

進行役だった桜庭が一旦休憩を挟むことを宣言した。

生徒会役員はその間、裏で打ち合わせを行う。

「すごい数の要望が出るけど、どうするんだ白崎」「これじゃ会議が終わりませんっ」

「でも、みんなの意見が沢山きけたのはいいことだと思っよ。生徒会の意見が何でもそのまま通るんじや、みんなで集まって会議をする意味がないよね」

鷹揚に構える白崎。

「うっ……わかりました」

「休憩が終わわり、再び会議が始まる。多岐川さんが、まずマイクを握った。」

「皆さん、聞いて下さい」

ついていた会議室が静まる。

「白崎新生徒会長は、みなさんの要望をなるべく聞きたいと言っています。ですが、ここをチャンスと自分の委員会の予算を増やすことばかり考えるのは、白崎新会長に甘えていることに他なりません。各委員長は、学園全体のためになるかどうかを真剣に考えて議論して下さい」

何となく、場に反省の空気が流れる。

それからの会議は、俺と桜庭が大急ぎでまとめた資料もあって、円滑に進んだ。

熱気に満ちた会議が終わる。

会議室を後にした人たちは、一様に疲れてはいたけれど満足げな顔をしていた。

「……白崎会長だったから、あんなに意見が出たんだと思います」

生徒会室に向かう途中。

廊下で、多岐川さんがそうつぶやいた。

「私では、ああいう会議にはならなかったでしょうね」

「ううん、多岐川さんが休憩開けにびしっと言ってくれたから、議論がまとまったんだよ。ありがとう」

「え、あ、そんな……」

屈託のない白崎の感謝の言葉に、もごもごと口もる多岐川さん。

「多岐川さんは、副会長として締めるところを締めてくれると嬉しいな。ケーブも輝いて格好良かったし」

「わ、わかりました……」

心なしか顔が赤くなつてないか、多岐川さん。

「資料を作ってくれた筑くんと玉藻ちゃんも、ありがとうね」

「ああ」

「いつだって任せてくれ。私たちは『白崎組』だからな」

「何それ、ふふふ」

白崎組か。

思えば、白崎が図書部に入ってきた時から、俺もずっと白崎組だった気がする。

そして今度は、多岐川さんも——

END



なあ、本当に
これで町中歩くのか？

帰りたい

当たり前でしょ！
折角衣装用意
したんだから

じっ…

でもなあ…

慶ちゃん
よく似合ってるよ！
みんなが吸血鬼コス…

HALLOWEEN CATS

夏野イオ

動ききい…

ちよつと高かったけど
注文して良かったー！

のぞみどうした？

かっ…

ななな何でもない！
さう行こつか！

のぞみフィルターON



他の人の仮装も
凄いね

うおー
凄い人だな

今年は特に人
多いらしいよ

商店街



まあでも…
一番格好いいのは

慶ちゃん
だけだね…



聞いてないし

見ろこの猫
超可愛い
スゲー俺の嫁
こてギヤーツ

慶…引つ掻かれ回数更新

完



ね、ねえそういうえば
私も結構頑張つて衣装
選んだんだけどどう…？

【設定・衣装集】

栞山栞いた行栞山の寮が没になりましたが、ページを削けたので、採用されたものも含めてネタ出し中のラフを抜粋して載せてみました。



りんごの衣装

全身タイツ

↑ 慶です。
仮装の衣装を考えるの楽しいです。
一番楽しんで描いた気がしますが没になりました。



消味期限切れのチョコ
はい♡



↓ 高峰です。
図書館大集合な寮もありました。

よう無に
なろう
俺はもういなくなりました



吸血鬼コス

↑ 採用寮の衣装設定。のぞみ寒そう。

のぞみの場合



折角のハロウィン
だから慶に
おかしめゆるわ



今日は10/31

消味期限
2013.10.25



何その顔



間違えた
これ来年か
やがたか
あかたか

受け取り所だわ

べっかんこう (以下「べ」) : さぁ対談の時間がやってきました。

榊原拓 (以下「榊」) : さてさて、今年は夏から秋にかけて、いろいろありましたね。

べ: まさにイベントラッシュって感じでした。特にトラベリングオーガストは初めての試みだったので、いろいろありました。

榊: 東京は物販がばたばたしてしまいましたね。大阪ではその反省を活かしてスムーズな物販ができたんですが、コンサート自体も、演奏から警備まで細かいところでいろいろと東京での反省を活かしたものになってるんですよ。

べ: 折角ノウハウができたのでまた機会があればコンサートできるというですね。

榊: ですねー。またしばらく先になるかもしれませんが。

べ: コンサートはなんだか懐かしい映像や曲が目白押しでちょっと目頭が熱くなりました。

榊: 僕もです。というか僕は静かにボロボロ泣いてました。

べ: 色々思い出しちゃいますよね。

榊: ソフトごとにね。あの時は苦しかったとか、この時は苦しかったとか。ずっと苦しいんですけど(笑) 産みの苦しみ。

べ: 終わってしまえばいい思い出です。思い出補正全開。

榊: イベントと言えば、今年は夏コミも初日の猛烈な暑さや二日目のゲリラ豪雨空振りなど大変でした。

べ: 正直夏コミは体力的に厳しかったです。

榊: 異常な暑さでしたけど。体力はつくとくにこしたことはないでしょう。

べ: そうですね。体力は大事だなと痛感しました。

榊: 夏コミではしほぼデイズも沢山お買い上げ頂きました。Webアンケートも沢山届いていますよ。

べ: ありがとうございますー。思った以上に夏野さんの原画がみなさんに受け入れてもらえたようでほっとしています。

榊: シナリオもちょっと短めにしてみたんですが、手軽にプレイできて良かったというお声を頂いています。あとは18禁シーンを……というお声も多いんですが、こちらはどうしたものでしょうか。

べ: せっかくのキャラ達なので、このままではもったいない感じもありません。

榊: そう言えば、オーガストは長年コミケに出展していますが、コミケセットより数が出た商品は初めてです。

べ: しほぼデイズくらいの規模で、また何か作れるといいですね。

榊: いろいろと新しいことを試していければと思います。

べ: さてさて、今の僕らは大図書館DS (Dreaming Sheep) を鋭意製作中ですよ。

榊: イベントラッシュも終わって、DSはそろそろまた雑誌やOHPで情報を出していくと思います。

べ: うーん、DSについてはいろいろとお話したいネタもあるんですが……。こんなシーンあるよとか。

榊: ちょっとこのタイミングで出している情報かどうか、難しいですね。

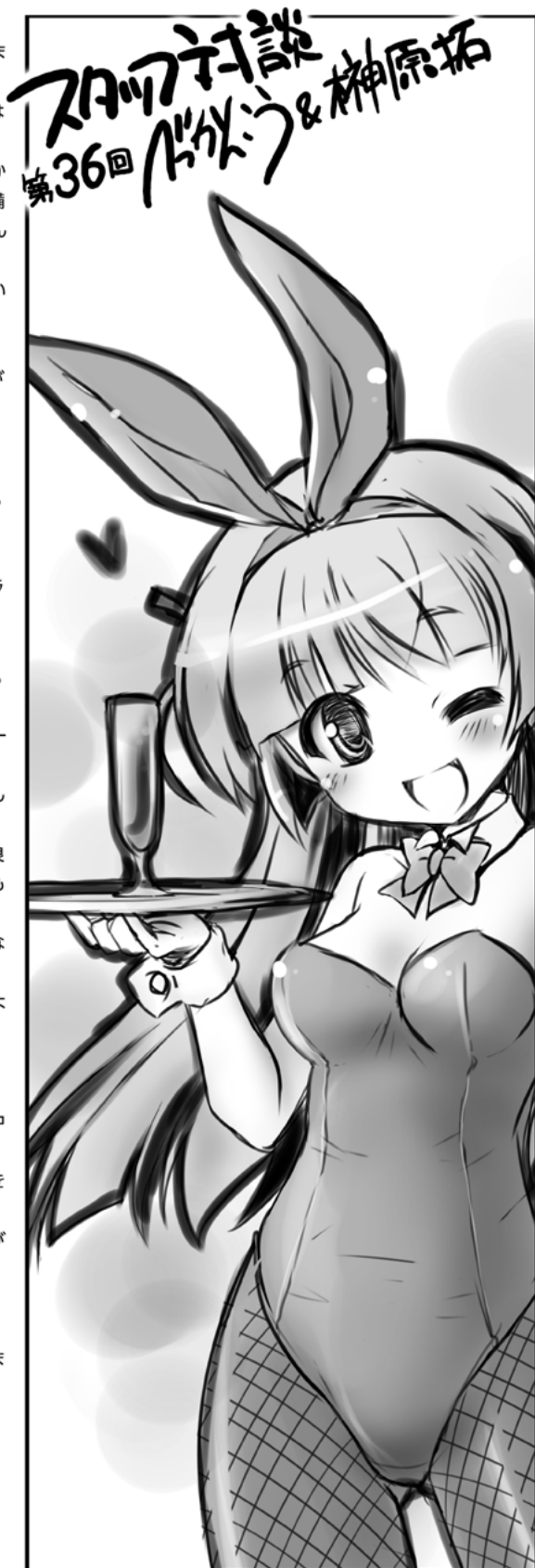
べ: 鋭意製作中です! よろしくね! ということで。

榊: しょうがないですね。あ、ウェディングドレスとかブルマでのHがありますよ! とか。

べ: キャラはまだ秘密で(笑)

榊: 今後の情報も、どうぞ楽しみに!

2013.9.19 16:40 社内にて



POSTSCRIPT - あとがき

オフィシャルハンドブックをお読み頂き、ありがとうございました。
お楽しみ頂けましたでしょうか。

まず最初に今年の夏コミで、その次にオフィシャル通販で、そして9月27日からは一般の店舗にて、『大図書館の羊飼いわく放課後しっぽデイズ』を発売しました。

こちらは、原画家としての「夏野イオ」のデビュー作です。プレイされた方は是非ご感想を、まだプレイされていない方は是非遊んでみていただければと思います。

そして、今開発室では『大図書館の羊飼いわく』のファンディスク、『大図書館の羊飼いわく-Dreaming Sheep-』の制作が佳境に入ってきました。

これからどんどん、各パートで作ってきた素材が組み上げられ、一つのゲームとしての完成を目指す作業に入っていきます。雑誌やオフィシャルサイトでも情報を公開して参りますので、ご注目頂ければ幸いです。

それでは、今回はこの辺で。

今後ともオーガスト/ARIAをよろしく願い致します。

2013年秋 オーガスト/ARIAスタッフ一同



オーガストオフィシャルハンドブック
2013年秋号

※禁無断転載・無断複製

最新情報満載!
オフィシャルホームページにぜひお越し下さい!

<http://august-soft.com/>

<http://aria-soft.com/>

大図書館の羊飼いわく
a good librarian like a good shepherd



大図書館の羊飼!

a good librarian like a good shepherd

オーガストオフィシャルハンドブック
2013年秋号

